

武井英明先生への惜別の辞

清 水 多 吉

武井英明先生は東京のお生れだそうである。東京のお生れだそうであると書いたのには、それなりの理由がある。というのも、先生の風貌、物腰は都会人にありがちな軽妙洒脱な感じというより、どちらかと言えば、憂鬱朴訥な感じだからである。勿論、この風貌、物腰が哲学を専攻するパーソナリティにふさわしいのは言うまでもない。

先生は、昭和五年に生れられたそうであるから、第二次大戦の敗戦では満一五才であったはずである。戦争の意味と敗戦の意味を感じとるには微妙な年齢であったかと思われる。自覚的には受けとめられないが、薄々は感じとりうる年齢か。あの当時、すべての青年は多かれ少なかれ、「哲学」的であらざるをえなかった。先生は、当時の青年の思いをそのまま胸にされ、早稲田大学文学部西洋哲学科に進学される。年譜によると、大学院博士課程修了までは順調な学生生活であったようである。専攻はギリシヤ哲学。なканずくアリストテレスの哲学。いかにも先生らしい専攻の選択であったと思われる。

さて、大学院博士課程修了後、先生は二、三の大学での非常勤講師の経験を積み、まず国士館大学の専任になられる。その後、本学が教養課程を熊谷の地に開設するに当り、請われて本学の専任講師となられたのは、昭和四二年

のことであった。以後、順調に助教授（昭和四六年四月）、教授（昭和五一年四月）と昇格され、熊谷教養部の発展に盡力してこられた。

周知の通り、平成期に入ると各大学は教養部を専門学部へ吸収合併し、新学部を開設するラッシュ期に入る。わが立正大学も例外ではなかった。熊谷教養部を解体し、多くの新設学部を開講する。この時にあたり、もともと先生には文学部哲学科あるいは大学院の兼任教授として古代中世哲学またギリシア語を担当していただいていた関係上、文学部哲学科へ移籍していただき、今日に至っている。以来、大学院から学部専門科目、更には一般教養科目に至るまでの幅広い科目を担当していただってきた。学生たちも先生の一貫性ある教育にあずかり、大いなる恩恵にあずかったと思う。とはいえ、ギリシア哲学は、何せ古典語の習得に大いなる努力を要し、かつ論究の方法論も多岐にわたるため、専攻の学生が必ずしも多くなかったのは、かえすがえすも残念であった。

さて、先生の専攻はアリストテレスの哲学と述べておいた。周知の通り、彼は古代哲学の最大の体系家である。したがって、彼の研究もまた、古来、多岐にわたる。先生の研究は、このうち倫理学を中心にしてのものであった。先生のアリストテレス研究に見るキーワード、「正義」「快楽」「無自制」といったテーマの追求は、結局、アリストテレスの実践的「中庸」の精神の追求の諸側面であったようである。哲学研究者は己れの追求するテーマに、己れ自身をなぞらえるものである。先生の文学部哲学科における態度は、常に「中庸」のそれであった。必ずしも先生の意にそわない事態が出現しても、先生が「無自制」になり、激怒された姿を見たことがない。私などは、いい年をして、すぐ「無自制」になり、声高に他者を非難して、結局、はずかしい思いをするのが常である。

その学問の希少性、そのご性格の中庸さという得難い先生ではあったが、近年、とみに体調を崩されたと聞く。私どもの再三の懇請にも拘らず、今年四月以降の講義をお引受けいただくことが出来なかった。先生のご健康の回復を

武井英明先生への惜別の辞

祈りつつ、不本意ではあるが、ひとまずお別れせざるをえない事態になった。先生の哲学科への永年のご貢献を、学生、卒業生とともに感謝申しあげ、以上を惜別の辞としたい。